

東北、池袋、そして武蔵野

——地域学への視座

赤坂憲雄

東北学を牽引してきた赤坂憲雄氏が、民俗学と文学の架橋さらに紀行文学へのフィールドワークそして武蔵野学へと広がる東アジアのなかの日本文化史探求の新たな視座を語ります。武蔵野台地の周縁に位置し、都市化の先端をゆく池袋（や、新宿、渋谷……）についてもお話を伺います。司会は「池袋学」から地域学への可能性を模索する渡辺憲司氏が対話を交えて行います。

■はじめに

本日は今日、後半に渡辺憲司先生（自由学園最高学部長）と対話の時間があるはずだったので、さつき入口で先生から「なくなつた」といわれました。大好きなんです、こういういい加減さ（会場笑）。僕も即興で仕事をすることが多いのですが、今日は『図書』という岩波書店のPR誌に連載した文章（「武蔵野を読む——武蔵野の挽歌から始まる」二〇一四年五月号）を基に話をさせていただきます。

今日初めて、こちら（自由学園）に伺ったのですが……おもし

ろいですね。こんな場所が残っている、ということだけでも奇跡のような気がしました。「武蔵野」ですね、ここは。まさに「武蔵野」が残っていると思います。そして、今日は「武蔵野学」の可能性を問いかけてみたいと考えています。

■東北と武蔵野を焦点に楕円を描く

僕は約二十年間、山形にある東北芸術工科大学に勤めて、ほとんど東北で暮らしていたのですが、二〇一一年一月半ばにそこを辞めました。現在の学習院大学に着任するのは数か月後。その手前で、震災が起きました。

その日の午前中、銀行で大事な判子を捺していました。東京に戻ってきて何をやるかと考えたときに、ひとつは、これからお話しする「武蔵野」を学び直したかった。それで、気分を変えるために引越そう、家を建てたいと思ったんですね。数か月間、あちらこちらをうろろして物件を探していたら、ちょうど気に入った土地が手に入りました。

晩年は武蔵野の面影が残る場所に暮らしてみたいという思いが

ありました。国分寺駅から五、六分のところにあるハケ（崖地）をわざわざ選びました。ハケがあつて野川が流れていて、その野川の源流が日立の研究所の中にある。まわりを散歩していると、雑木林が点在して残っていて、大岡昇平の『武蔵野夫人』の舞台なんです。「ここ、いいなあ」と思いました。

その土地を買う契約をして判子を捺していたのが、二〇一一年三月十一日の午前中でした。外に出て、産経新聞の記者と取材の打ち合わせをしていた時に、グラグラグラッと国分寺の駅ビルが揺れた。おそらく、その一、二時間の違いで、僕は今住んでいる場所に住むことはなかったのかもしれない。先に地震が来ていたら、きっとやめていたと思います。それから数年かけて、新たな棲み処をそこにつくったんですが。

僕は東北を二十年間歩いて調査・研究をしていましたが、そこを離れて本当にまもなく——もちろん偶然ですけれども——東日本大震災がはじまり、また僕は東北に引き戻されて、そこでいろいろな体験してきました。

震災から三週間後あたりから、東北の被災地を歩きはじめました。一年半くらい、歩いていましたね。「何をしていたんだろう」って、後で思い返すと、わからないことがいっぱいあるんですけども、とにかく歩いて、そこで起こっていることを見届けておきたい、目に焼きつけておきたい。そういう思いだけでした。ですから、花が供えられているところを見つけると、車を停めて降りて、ひたすら手を合わせる、ということをしていただけだったと思います。

デジタルカメラで写真をずっと撮っていたのですが、不思議な

ことがありました。僕が震災後に初めて被災地に行ったのは東松島市の野蒜という場所。教え子の両親が住んでいて、津波で流されたと聞いたので、山形時代に使っていた家財道具一式を差し上げたんです。そこから石巻に向かったのですが、その石巻のあたりから、写真から色が消えてしまったんです。モノクロになって、所々に黄色とか緑とか青が入っているような、奇妙な写真になってしまった。専門家に聞いても「どうしてこんなことが起こるのかわからない」と言われて、僕の記憶の中では、衝撃を受けて世界から色が抜けてしまっている、だから僕が心で見ている風景が写ってしまったんだ……そんな感じもしました。

今日は東北の話をするつもりはないのですが、二十年間ずっと東北の地で、おじいちゃんやおばあちゃんを訪ねて話を聞くことを重ねていました。その中で、いつでも僕は、東北と武蔵野という二つの場所を焦点として「楢円」を描いていたような気がしています。中学生の時だったでしょうか。数学の授業中、先生が黒板に「楢円というのはこういう風に描くんだ」と教えてくれたんです。二つの焦点を置いて、そこから糸を引いて伸ばして、そこをずっと辿って行くと楢円ができる。この楢円というものが、思想的にとっても大きな意味があると思っています。つまり、ひとつの中心があつて円を描くと、中心との距離でしか自分の場所を確かめられないけれども、楢円は、糸の長さとか、どんどん融通無碍に世界のイメージを変えられることができます。二つの焦点を置くことによって、ひとつの中心に呪縛されなくて済むんです。たとえば、僕は朝鮮半島の済州島にずいぶん通いましたが、済州島を焦点とするとき、世界のイメージはどのように描けるんだろう、と

思う。僕はそういう「楢円」という思想のあり方に関心を持ってきました。

これまでの日本文化像は、ひとところひとつ——京都や東京という中心があつて、同心円状に描かれてきました。僕はそれを「ひとつの日本」と名づけました。その「ひとつ」に対して、東北というもう一つの焦点をもつて世界を眺めると、どのように世界の見え方が変わってくるのか。それを「いくつもの日本」と名づけて「東北学」という地域学をつくり、二十年間にわたつて仕事をしてきました。その際にも、つねに僕は「武蔵野」を見えないもう一つの焦点のようにしてモノを考えていた、そんな気がしています。

■地域学と「内発的發展論」

地域学を僕が東北で考え始めた時、つねに頭にあつたのは、社会学者の鶴見和子さんの「内発的發展論」でした。「内発」というのは「外発」に対しての「内発」です。つまり、それぞれの地域社会には固有の歴史・文化・風土があつて、それを一つひとつ掘り起こし、糧にして、抛り所にして、その地域に暮らす人たちが、将来の自分たちの地域社会をデザインしていく手がかりにする。そういう知の運動を「地域学」と名づけてきました——といえますか、そう受けとつてきました。東北を起点にして地域学の可能性を問う。「東北学」は、あくまで実践的な試みなんです。単なる机上の学問ではない。ですから、震災後、これからはもう一度東北をフィールドにして「東北学」の第二ステージを構築しなくてはいけないと思つたんです。ただ、それはさまざまな現実

によって次から次へと蹴散らされていきましたが、それでも僕は福島の原発が爆発する光景を見ながら、誰一人、そこで何が起つているのか説明もしてくれないような、そういうものと共存していくことはあり得ないと思ひました。その時に感じたことは、今もまったく変わりません。

それから僕は、自然エネルギーの可能性について問ひかける仕事をしてきました。以前から一緒に仕事をしてきた人たちと集まって、いつの間にか「会津電力」という地域電力をつくつてしまいました。僕にとつて自然エネルギーは、地域が自治と自立を求めるとの大切な抛り所です。震災後、僕はたまたま、政府の復興構想会議の委員になりましたので、講演に呼ばれることが多かつたんです。ある会合で話をしたあとに、司会の方が「何かご質問は？」と言われて、みなさん困つたような顔をされていたんですけれども、どこかの社長さんが手を挙げて、お話をしてくださつた。非常に記憶に残っています。彼は二つのことを言いました。「あなたの話には、一つも数字が出て来ませんでした。ポエムです」と。

嫌味を言われてるんですが、僕はとても嬉しくなりました。彼は、その「数字」が世界をつくり、世界を動かしていると信じている。でも、僕は「数字」では拾うことができない現実と向かい合つているわけです。それを「詩です」と言われて、もちろん引き下がるわけにはいきませんよね。それから社長さんは、もうひとつ言いました。「あなたは、自然エネルギーのことを一所懸命お話されましたが、自然エネルギーというのは、雇用を生みません」と。

僕はがっくりきたんです。他の方からも言われました。ところが、会津電力という形で小さな太陽光発電を始めて一年もしない間に、社長をやってくれている酒屋の社長が「二十人くらい雇いが生まれているよ」と教えてくれました。嬉しかったですね。

それで、どういうことなのかわかりました。東京の大企業の社長さんが「自然エネルギーは雇用を生まない」と言ったのは、つまり、自然エネルギーって儲かるんですよ。利益がちゃんと出るんです。でも、そこから生まれた利益を、たとえば地域にシェアするといった発想はまったくないんです。生まれた利益はすべて東京の本社に還流するシステムをつくるのが、企業のビジネスモデルなんですね。

ところが、僕らが会津電力で始めたのは、太陽、風、水といった自然からエネルギーをいただくということが、技術的に可能になったからなんです。そこで生まれた利益は、誰かが抱え込むのではなくて、そこに関わっている人たちが、みんなで分配する、シェアをすることを当たり前にやっている。そういうビジネスモデルをつくると、雇用が生まれるということに驚きました。つまりこれは、価値観の闘いなんだと、僕は感じています。

「東北学」という地域学を始めた時に、自分がどこに向かっていいのか、よくわからないこともありましたが、震災後に、そういう形で、自分たちの小さな地域電力の会社をつくり、いろいろな活動を始めてみると、それまで見えていなかった、さまざまなことが見えてきた、という気がしています。

■宮本常一と武蔵野

今でも僕は福島に、東北に通っていますが、同時に僕にとって武蔵野は故郷なんです。故郷である武蔵野の風土に、きちんと向かい合ってみたいと思うようになりました。東北は、僕にとっては父親の故郷です。僕は六人兄弟の末っ子で、上の兄弟たちは福島で生まれ育っているんですが、僕は東京の四ツ谷に生まれて、二歳の時に府中に引っ越してからは、府中・国分寺・小平という武蔵野の一角でずっと暮らしてきました。

二十年間、東北の各地を訪ね歩いてきましたから、四季折々の東北の風景というものを、よくわかっているんですけども、たとえば、春が来て、雪が解けて、ブナの巨木のまわりから雪が解けて……そういう話をおじいちゃんがしてくれる時に、やっぱりわからないんです。そこで暮らしているわけではないし、彼が話してくれる、春を迎えた喜びが、抽象的にしか自分にはわからない。いわば、全身で季節の移ろいや東北の風景を感じとることができずにいる。そういう引け目も感じてきました。

「先生、なんで、東北に引っ越して住まないね？」と言われてました。でも僕は、よく知っていました。僕がたとえ引っ越したとしても、僕は土地の人にはなれません。僕の知っている先生たちも、息子、孫の世代になって初めて、その土地の人だって顔ができるようになる。だから、生まれ育った武蔵野の風土を、もう一度自分で見て、聞いて、歩いて、そして武蔵野を書きたいと思うようになりました。

きっかけはいくつもありました。宮本常一という民俗学者がいます。彼は「あるく、みる、きく」という方法で日本全国を歩い

て、大切な仕事を残してくれた人です。

彼は周防大島という瀬戸内海の小さな島の出身ですが、一九六〇年代初めの頃、府中に引っ越してきました。府中という街の北のはずれに中古の家を買い求めて、暮らすようになる。ですから六〇年代以降の宮本常一の仕事の中には、武蔵野が微妙な影を落としています。そして、たくさんの武蔵野論を残している。

偶然なのですが、宮本さんが暮らしていたのは、府中市新町三丁目です。ちょうど同じ時期に、僕は府中市新町一丁目に住んでいました。ですから、子供の頃の遊び場、テリトリーの中に入っていたんですね。ですから、どこかで宮本常一という人とすれ違ったかもしれない。まあ、わかりませんが（笑）。でも、同じ時代に、ほぼ同じ場所で暮らしていた。ですから、宮本さんの描く武蔵野の風景がひとつひとつ、僕にはわかるんですね。その「わかる」という感覚が、僕にとっては新鮮でした。二十年間、東北を歩いてきて、そういう意味で「わかる」と感じたことは、あまりなかったと思います。宮本常一が見ていたモノや風景が、言葉や写真でたくさん残されていますが、その風景を見ると「これは自分が小学生の時に見ていたものだ」と思う。何がそこに隠されているのか、その意味するところはまったく知らないままに、自分もその風景を目撃していたんだと思います。

宮本さんの『自然と日本人』という著作集の四十三巻に、武蔵野論が収められています。武蔵野の自然といわれているもの——大きな古い屋敷のまわりに木々が生えていたり、かつては畑がたくさんあって、その脇にはお茶が植えられたりしていた。玉川上水にはその分水路が張り巡らされている。そういう武蔵野の自然

について、宮本さんはこう言っています。それは「ただ単なる自然ではなく、人の手によって出現した自然」である、と。これが僕にとっての起点です。「自然の中に生きた者は自然と格闘しつつ第二次自然を作りあげていった」。宮本常一の風景論の核にあったテーゼですが、この〈作られた二次的な自然〉が、武蔵野を読むための鍵になるだろうと感じています。

このキャンパスには、すごく自然が残っていますよね。縄文時代以来の元々の自然と、そこに人間たちが手を加えて作った自然とが見事に溶け合いながら、奇跡のように武蔵野の面影を残す、自然風景が残されていますね。一つの事例かもしれないと思います。宮本さんの言葉を借りれば、風景とはそこに暮らす人々が作るものであり、その人々がいかなる思想を持つかによって、その地域の風景は決まってくる、ということ。いい言葉だと思います。民俗学者の柳田国男は、あるエッセイの中で「風景を裁える」という言葉を使っています。風景は、今そこに生きていく人たちが種を蒔き、たくさんの人たちが水を遣り、守っていくことによって育っていくものだ、と。

宮本常一という人はリアリストで、柳田国男のように詩人ではないので、もっと即物的に「風景を作る」と言っています。宮本さんの風景論は、あくまで実践的なんですね。自然を鑑賞する態度は、ほとんど見られない。地域に生きる常民たち——普通の私たちを主人公として、地域の生活や歴史に根ざして、それを豊かにするための風景を作ることが民俗学の目的であると考えていたと思います。

■国木田独歩の「武蔵野」

今日は、国木田独歩の「武蔵野」についてお話をしようと思っています。

国木田独歩は、明治二十九（一八九六）年九月、二十五歳の時に渋谷に移住して、翌年四月まで暮らしました。渋谷に引越す五か月前の四月に、佐々木信子という女性と結婚していたんですが、破綻して別れています。独歩は、信子さんとの別れという厳しい精神的な傷を負った体験から、いわば癒しを求めめるかのように、丘の上の小さな借家に移り住んでいます。

そこで独歩はひたすら散歩をするんですね。そして自分がそこで見た、東京の郊外に広がっている雑木林と畑と野原がある風景を、水彩画のように淡く描いていきます。美しく懐かしい。それは独歩によって初めて発見されたものであり、同時に僕にとつては幼年期の記憶に繋がっていくもの。そういう意味で、独歩の「武蔵野」を読んだとき、たまらなく懐かしさを覚える瞬間がありました。

季節が大切だと思うのですが、独歩は秋から冬、春の初めにかけて、渋谷村に暮らしました。独歩が暮らした場所は、渋谷区宇田川町、いまNHKがあるあたりです。そのすぐかたわら、道路を挟んだ歩道の隅に「国木田独歩住居跡」と書かれた標柱が立っています。

明治三十年代、そのあたりはまだ郊外でした。すぐ向こうには武蔵野がはるかに広がっていた。独歩はその雑木林の、野原の中の細い道を、一人で、時に友人たちと一緒に、くり返し散策しています。瞑想に耽り、思索に耽りながら、それを日記に書き綴っ

ている。その日記を起点にして、後に随筆を書く。それが「武蔵野」という作品になります。散歩とか散策という名の、近代の新しい旅は、そのとき生まれただろうと思っています。

のちに友人になる田山花袋や柳田国男といった文学者たちが独歩のもとをたびたび訪れては散歩をする姿が、日記の中にも描かれています。

学習院大学の大学院で、独歩の「武蔵野」をテキストに選んで授業をしました。おもろかったですね。そのゼミに参加してくれていた大学院生が、武蔵野にはまってしまって、それをテーマに非常にすぐれた修士論文を書きました。その中で、彼が断定的に「独歩の武蔵野は渋谷だった」と書いています。いろいろな人たちが「武蔵野」について書かれていますけれども、前田愛さんは独歩の散策の範囲は世田谷のほうに広がっていたんじゃないかとも書いている。

このことはずっと気になっていました。独歩の日記の中に、散策のルートや地名は出てこないんです。ですから、一人で、あるいは数人で散歩をしている時間を確認すると、ほとんど一、二時間。そんなに遠くまで足を延ばしているとは思えない。つまり独歩の武蔵野は、おそらく宇田川町の家を周囲、おそらく数キロほどの渋谷だといえます。僕は漠然と「武蔵野」を読んだ時、独歩の描く風景に既視感を覚えたんです。国分寺のあの辺りかな、とか思った。でも徒歩ですから、国分寺や府中まで歩いて来ているはずがない。独歩は、僕が一九六〇年代に眺めていた武蔵野の風景を、渋谷の周辺で眺めていたということです。

学生が、たくさんの昔の地図を集めて、明治二十年代の地図記

号を確認しながら色鉛筆で塗り分けていくんです。そうして「先生、独歩の描いた武蔵野は全部渋谷にありますよ」と言うのです。川岸は全部水田になっている。高いところには竹畑があり、雑木林がある。そして池がある。つまり、独歩の武蔵野は渋谷だったということが、このテキストを読むための決定的な前提になるということです。

武蔵野といえば府中や国分寺あたりの風景を思い起こすのは、多くの人に共通するところだと思いますが、それが渋谷の丘の上に広がっていた。独歩が犬を連れて雑木林で瞑想に耽ったという場面が出てきます。その犬は、実在の犬ではないと論じられている方もいらっしゃいます。でも僕は犬はいたと思います。根拠はいくつかありますが、二葉亭四迷が翻訳したツルゲーネフの「あいびき」という小説が、まさに犬を連れて散歩の風景を描いているんですね。それを重ね合わせられると思います。その場所も確認しました。今の道玄坂のすぐ下にナラの雑木林があった。おそらくそこだろうと思います。独歩が住んでいた家から一キロも離れていないような場所に、瞑想に耽るような雑木林があった。

明治三十年前後の渋谷は、まさに郊外のかたわらにあり、そこには豊かな武蔵野の田園風景が残っていた。それがやがて急激な都市化の中で消えていく。その消えていく武蔵野の後ろ姿を独歩は目撃したのではないか。十数年後に「もうあのととき自分たちが散歩しながら見た風景はどこにもない」というふうに書いています。

ですから、独歩の描く道玄坂の光景は、変化していく郊外の典型的な風景だったと思います。おそらくこのとき、散策という名

の新しい旅が生まれていたんだろうといえます。心の瞑想、思索というものが重なり合いながら、近代の散策という小さな旅のスタイルが生まれている。はつきりしているのは、独歩の以前にはこういう散策をしている人はいない、ということですね。独歩はその散策という独特な旅の中で、武蔵野を発見したんですね。

小金井の桜の名所になっているあたりを散策する場面が「武蔵野」にあつて、作中では「友達」と出てくるんですが、信子さんという恋人であると思われず。歩いてみると、茶屋があつて、そこのおばあちゃんが二人に向かって言うんです。

「なんで真夏にこんなところを歩いているの？」

春の桜のシーズンはものすごい人出になる名所なんです。それをこんな真夏に散歩する馬鹿がどこにいるか、そういう感覚なんですね。でも独歩にとっては、大好きでたまらない信子さんという年下の恋人と歩いているわけですから、嬉しいに決まっていますよね。この日のことを決して自分は忘れない、と書いていますから。

でも八月だと暑くなかったのかな、と思う。今の学生たちはインターネットで検索して調べるんです。気象データにアクセスすると、この日の気温とかが全部わかるんですよ。びっくりしたんですが、明治三十年頃の気温は、今よりも何度か低いことがわかって、それならデートもできたかな、と（笑）。

そして、ツルゲーネフの「あいびき」という二葉亭四迷が翻訳した小説は、おそらく独歩が武蔵野の「落葉林」を発見する仲立ちになっていたのではないかと思います。「あいびき」は変な小説で、犬を連れて散歩をしていた男が、白樺の林の中で男女があ

いびきをしている姿を観察しているんですね。その二人は別れ話をしている、最後は離れてゆくんですが、最初と最後に白樺林の風景描写がある。独歩はここから、落葉樹林が武蔵野の風景の核心であることを発見したのだと思います。くり返しますが、独歩は九月から翌年の三月、四月つまり秋から冬にかけての武蔵野を体験しているのです。

武蔵野の風土は、北海道の大自然でもないし、九州のような照葉樹林でもない。人間の生活のほうで自然を囲い込むように立ち並んでいる、そうした風景とも違う、生活と密接に絡み合う姿こそが武蔵野の風土というふうに考えています。独歩が「武蔵野」という作品を書いたあと、武蔵野周遊ということが東京の若い知識人たちや学生たちで大流行して、十年、二十年で武蔵野を散歩するということが、大勢の人たちの趣味になってしまっただけです。だから独歩の「武蔵野」は、こうした新しい旅を導く資料となつたわけです。最近では東京都内を歩いていると、休日に東京散策ツアーが各所で休日行われていますが、独歩はその先駆けだったのかも知れません。

■「武蔵野学」という視座

宮本常一が『私の日本地図10 武蔵野・青梅篇』のあとがきにこう書いています。一九七一年の文章です。

私はこの書を書きつつ、この書が武蔵野の挽歌のようになるのをどうしようもなかった。

一九六〇年代、僕もよく覚えていますが、まさにその武蔵野がどんどん消えていく風景の中に、宮本さんもいたわけです。こん

なことも書かれています。

武蔵野は広い。百姓たちがそこをひらいてもなお開きのこしのところがあつた。それは開きのこしではなくて、草刈場・薪林として利用されている。平地の村でも炭焼などをおこなっていた。

玉川上水が開かれ、十七世紀後半から武蔵野の大地にはたくさんの農民たちが暮らしの場を求めてやってきます。街道沿いに開拓の村ができる。畑があり、墓地があり、その一番奥まったところに雑木林が広がっている。その雑木林は、それぞれの家のものではなくて、村のものなんです。入会地なんです。入会地が背後に広がっている。人びとは、いわば里山を雑木林の形で自らデザインして抱えこむことによって暮らしを成り立たせていく。そうした炭や薪をとるための雑木林も広がった。しかし宮本さんは、こう言っています。

戦時中そういうところへ大会社の工場や軍事施設などがもうけられることになり、農民たちはその所有地をせめてゆくことになる。戦後それが、もとの所有者の手にはかえらず、学校の敷地や大会社の敷地になったものが多い。米軍が接収して米軍基地になったものがさらに多い。

府中には大きな米軍基地があります。そのかつての姿は、雑木林だったのかもしれませんが。僕が子どもの頃には、まだ府中の北のはずれのあたりには雑木林があちこちに残っていました。炭焼きはしていませんでした。それがたちまち姿を消していく。僕の前には、雑木林と畑と原っぱが広がっていて、それがどんどん新興住宅街に変わっていくのを眺めていました。だから、武蔵野の

風景のなごりである雑木林は、僕には虫捕りのイメージなんです。クワガタやカブトムシを夢中になって捕りました。秋には落ち葉が敷き詰められていて、それを集めて遊んだり鬼ごっこをしたりした。台風直後の雑木林は木が倒れていて、ジャングルのようで楽しかったことを覚えています。そんな雑木林のかたわらには、キャベツ畑が広がり、麦畑が広がっている。僕にとって武蔵野のかけがえのない風景は、幼年期の記憶に重なっていますが、それが消えていったわけです。

明治三十年代、渋谷には都市化の波が押し寄せていった。一九六〇年代には、府中や国分寺あたりに開発・都市化の波が押し寄せていった。今では、八王子のほうまで広がっています。都市化の波に吞まれて、様々な新しい時代の人と社会がぶつかり合う場所。独歩が暮らした頃の渋谷は、まさにそういう郊外の風景だったと思います。僕はそのほるか後に、府中や国分寺で同じものを見ていたのかもしれない。宮本常一が語っていたのは、独歩が描いた武蔵野のなごりであり、僕が見た雑木林の前史だったかもしれない。そんな気がします。

宮本さんの『私の日本地図10 武蔵野・青梅』には「太古以来十七世紀の初めまでは狭山丘陵やそのほか水のあるところを除いて、ほとんど人の住むことのなかった野を開いて人々は住みついた」とあります。自由学園のキャンパスは、まさに学校がつくられたゆえに守られた武蔵野の風景をふんだんに囲い込んでいると思います。我々もこの武蔵野に暮らす者として、住民の足元にうずもれていく風景をもう一度、ひとつひとつ手探りしていかねればならない。このキャンパスの中には、縄文遺跡がたくさんあ

るんですよ。ここは縄文以来、一万年の歴史の中に、人々の暮らし、人の生まれてきた大地だと思えます。僕はこれから「武蔵野学」というものを切り拓いていこうと考えていますが、その大きなヒントをいただいたような気がしています。

■質疑応答

質問者 武蔵野の風景が、人間によってつくられた自然という話がありました。その風景が喪失される場合、単に自然が失われたということではなく、それをつくっている人間や社会の変化によって風景も変わるのだと思います。近代における人間の変化のひとつに「散策」ということを挙げられましたが、僕は、近代化というものは、散策という旅のスタイルから、新幹線や飛行機などのように、場所と場所を点で結んでしまうものに変化したことかと思っただけですが、どうお考えですか。

赤坂 「高等遊民」を知っていますか？ 「遊ぶ民」——今でいうサラリーマンのような人たちの源流は明治時代に生まれて、その人たちは「遊民」と呼ばれました。つまり、夏の暑い日に玉川上水のほとりを散歩するなんて、昔の人々にとってはありえないんです。でも、そういうことを始める人たちが現れた。だから、明治の文化の背景にいるのは、まさに高等遊民なんです。彼らが新しい文芸を創っていくわけです。

生活や社会が変わることによって風景が変わる。まったくその通りです。ひとつだけ例を挙げます。雑木林の入会地は、村の人々をつなぐための見えない共同の力の結節点だったんです。

だから、入会地が接收されて、工場ができて、米軍基地ができて、そして消えていくと、入会地という共同の力の結節点が失われていくことによって、その風景を守ろうとする力もなくなってしまう。今では「コモンズ」という言葉がありますが。まさに入会地という「コモンズ」が風景を守り育てていくものであったということが、社会のあり方を考える重要な手掛かりになります。

今の日本列島には、一億三千万人が暮らしています。それが将来、四、五千万人減ってしまう。その人口が必要とするテリトリーも狭まっている。人間たちが撤退していくエリアが出てくると、そこには他の生物が進出してくる。つまり人と自然の境界がどんどん後退していくわけです。そうなった時に、その時代の「コモンズ」としてみんなで共同利用する場所を、どのように景観を守りながら、自分たちで守り抜くのか。新しい暮らしを支える中で、どのようにデザインし直すことができるのか。くり返しますが、「コモンズ」という言葉は、これからの社会をデザインしていく上で、大きなヒントになると思っています。

司会（渡辺憲司） 入会地のデザインというのは、最近先生がお書きになった『性食考』（岩波書店）にもありますが、野生化の問題ですね。具体的には、震災以降における原発事故の被災地に、イノシシがものすごく出てくるのか。そういうものを含めて、我々はこれから入会地をデザインしていかなければならぬということでしょうか。

赤坂 スタジオジブリの映画に、高畑勲監督の『平成狸合戦ぽんぽ

こ』があります。つくられたのは一九九四年ですが、一九六〇年代から七〇年代の風景をひとつの素材にしてつくられています。あの映画で、狸たちは人間に姿を変えて、人間たちに紛れ込んで生き延びようとしていますよね。僕は今、人間たちの中に紛れ込んでいる狸が、もう一度、狸に戻って、広がっている里山のような景観の中に棲み処を求めている時代がそこまで来ていると思っています。ただ単に被災地の話ではなくて、二十年前くらいから、都市部に野生動物たちが侵入してきたという記事がすごく気になって、たくさん集めてきました。もうだいぶ近づいてきましたね。ひしひしと僕は感じています。それはもうはつきりしているんです。理由は人口です。過疎化が進んでいくと、人口によって自然を制御する力が弱まって来る。そうすると野生動物が入って来るんです。里山的な環境がどんどん広がっていくと、都心部のすぐそこまで、野生動物が出現する環境は広がっていきます。たぶん我々の姿を、野生動物たちはどこかで見ています。だんだん人間のテリトリーを縮小していく。動物たちの場所がどんどん増えていく。すぐそこまで野生が来ている。

今、そういう関心を持ってテレビを見たり、新聞を読んだりしていると、至るところで野生動物が都市の中に出現している。もうそれは珍しいことではなくなっちゃいましたね。今は右往左往していますけれども、そのうちにもっと野生動物の圧力がかかってきたときに、どういうところで緩衝地帯をつくっていくか、きちんと議論しないといけない時期がやってくるでしょう。人工になっている環境を野生に返す運動というか、実

験も世界中で行われています。

たとえば、人間が暮らさなくなって放置された場所は、放っておけば藪化し、雑木林に戻っていく。だからむしろ我々が、その戻っていく自然に対してどのようにに関わり、行動するかということをきちんと考えていく必要がある。明治神宮がつくられたときも、全国から木が集められましたが、当時の非常に優れた造園士たちが、この森をいつの日か照葉樹林に戻していくためには、どのようにデザインをすべきかを、徹底的に検討したそうですね。その知恵と技術を実践するにあたって、立ち入ってはいけないエリアを決めたり、最初は針葉樹を多くしたり、いろいろなおことをやっただといえます。

荒地だったところに、人間が知恵と技術を駆使して、控えめに関わることで、自然がどんどん野生に還っていく。今は家が建っているけど、都市の中の自然の風景はどんどん広がっていくと思っっています。それを放置するのではなく、やわらかく関わりながら、人と自然、野生との線引きをどう考えていくのかといったテーマの中で、議論して、研究していくべきなのではないでしょうか。

(あかさか・のりお 学習院大学教授)